

文化立都の志

堀井 大阪21世紀計画は、大阪の文化レベルを底上げしようと高い志を持った人たちによって展開された一大社会運動でした。今、その26年を振り返って、山崎さんは、現在の大阪をどのように見ておられますか。

山崎 私は、大阪の文化振興のお手伝いをして40年になります。昭和51年、大阪商工会議所の主催で「都市の復権」をテーマに『大阪都市文化会議』を開きました。当時、私は大阪大学の教授としてこれに加わり、作家の小松左京さんや司馬遼太郎さん、梅棹忠夫さん(国立民族学博物館館長・当時)、佐治敬三さん(サントリー社長・当時)といった関西の知識人や経済人とともに、「大阪をなんとかしよう」と、新しい時代における文化都市・大阪のあり方についてさまざまな提言を行いました。その後もいろいろな局面でお手伝いをしてきましたが、いまだに同じ議論が繰り返され、状況はむしろ悪くなっていると思います。梅棹先生はすでに40年前に「大阪は下衆の町や」と喝破していましたが、やはり大阪は市民も含めて、現実を直視しなくてはなりません。大阪よりも経済的に苦しくて、人口流出も激しい中小都市のほうが元気ですね。危機感が目前に迫っているから、若い人たちが動き出す。例えば、サントリー文化財団では毎年、「地域文化賞」を出しています。各地の放送局や新聞社に推薦していただき、選考委員会にかけて決めるのですが、そうした中小都市のほうが頑張っていて、大阪からの受賞者はとても少ない。大阪は中途半端に豊かで、危機感が足りないのかもしれない。

堀井 それでも、大阪のまちはずいぶん美しくなったと思います。文化立都に志を寄せる人々も増え、それなりに活動が展開されてきた気がするのです。21世紀を迎えて、今度はなぜ、逆風にさらされるような状況が生まれたのでしょうか。

二つのアイデンティティー

山崎 たしかに美しくはなりました。しかしある時から、大阪人のアイデンティティーのありようが、今日の根本的な不幸を生みました。大阪と名古屋を比較すると、大阪は日本で「最小の全国都市」で、名古屋は「最大の地方都市」なんですね。名古屋には、昔からの素封家や経済人といった豊かな人たちが市内に住んできました。つまり名古屋人は名古屋にいるわけです。ところが大阪は、江戸時代から徳島商人や近江商人といった人たちが来ているように、さまざまな出自の人たちがたくさん集まってできた都市です。大阪の沖縄県人会は、現在7万人の会員がいる。大阪に住んでいる人たちは、かなりのパーセンテージで地方から来られた人でしょう。一方、大阪出身の指導的立場にあった経済人たちの多くは、阪神間など大阪の外に住んでいます。名古屋と違って地元出身者が少ないにもかかわらず、何故か大阪はナショナリズムを追求してしまいました。私はかねて非常に心配し、反対もしたスローガンに「好きやねん大阪」というのがあります。当時、「I♥NY(アイラブニューヨーク)」というステッカーがありました。大阪生まれ育ちの人が言うならまだしも、地方出身の大阪人にとって、「好きやねん」という言葉は外国語に等しい。大阪はさまざまな人が集まる全国都市としてのアイデンティティーを打ち出すべきだったのに、ローカルティーで人々を鼓舞しようとしたことが大きな問題です。

堀井 たしかに大阪の原点は、人やモノの交叉集積の場ですね。

山崎 もうひとつは、大阪は「庶民のまち」、という打ち出しかたです。大阪の人たちは、実際は高尚な趣味を持っているし、生活水準の高さを求めている。ところが東京と京都が気になってしかたがないのです。大阪から見ると、東京人は威張っているし、京都人は気取っている。それならば「大阪は庶民のまち」と打ち出したのです。実質的には良いことでも「庶民のまち」というスローガンを掲げた途端に、まちの中をステテコと腹巻きで歩いてもいいんだというセンスを生んでしまいました。これは大きな問題です。中央の権威に屈しない大阪人気質は良いのですが、不必要に自虐的・自悪的趣味に走って、権威というものを自らつくる努力をしていないのです。だから、よその人は大阪をなめる。かつて司馬遼太郎さんが「“ここから大阪府”という案内板を見た途端、ドライバーが窓からタバコの吸殻を捨てる」といったのを思い出します。また、大阪に対する極端に偏ったイメージを広めてしまった作家たちもよくありません。今東光は河内弁と大阪弁を一緒にしたばかりか、河内の人たちをデフォルメして描きました。林芙美子が『めし』という小説を書きましたが、すべての大阪人が小説に描かれているような庶民生活をしているわけではありません。そうして、大阪の庶民意識とは、高級文化を嘲笑い、反抗心を燃やす対象である、としてしまったのです。歴史を振り返ると、大阪はとてもハイカラなところでした。大正末期から昭和初期にかけて活躍した大阪出身の三好達治(詩人)や佐伯祐三(画家)は、当時ハイカラの最先端を行くモダニストでした。また東京銀座の向こうをはって、大阪にもいわゆるカクテルバーが生まれました。大阪というのは多彩な文化をもっていたのですが、戦後になってそういうハイカラな側面が忘れられてしまったような気がします。

経済界と自治体

堀井 大大阪と呼ばれた時代は、文化・芸術・産業が活気にあふれていました。

山崎 そうです。また大阪の経済界には、経済や文化のリーダーシップを担おうという意識が昔から強くありました。関西経済連合会は、日本経済団体連合会の向こうを張るぐらいの意気込みでした。各企業から出向した研究員が、企業の枠を越えて大阪を考え、天下国家を論じてきました。そうした気概が企業にありました。それは関西電力、住友金属、住友銀行であり、ちょっと異色ですがサントリーとか、ダイキンのリーダーはおもしろい人でした。そのことが皮肉にも行政を弱くしてしまいました。弱くなったというより、行政が責任を感じなくなるような状況を作ってしまった。

堀井 もちろん、行政でリーダーシップを発揮されたかたもおられましたけど。

山崎 大阪市長で頑張った方は何人かいます。なかでも大島靖さんは、なかなかのアイデアマンで、部下の統率力にも長けていました。戦後長らく闇市の様相だった大阪駅前を、区画整理し、駅前ビルを建て、変貌させた人です。その大島さんから、「駅前ビルは高層階の人气がない。お客さんを呼び込むためにはどうしたらいいか」と聞かれたことがあります。そこで私は、「音楽ホールが劇場か、何か人の集まる場所をつくればどうか」と提案しました。「上層階で音楽や芝居を楽しんだお客さんは、帰りの階でいろんな店